



トライブックス 「TP100」

◀1949年製。同社が開発したフロア型3ウェイシステムの1号機である。ユニットはPR-100インペリアルとほぼ同じだが、初期のシステムにはウーファーに解像力の高い38cm A-15PM/ST-600が搭載されている。後期になるとP15LLが搭載されている。リアルで密度の高い再生音が魅力で箱の両サイドにバックロードホーンの開口部があるため、コーナーにセッティングすると大型システムに負けないスケールを引き出すことができる。市場価格180万円ペア

トライブックス 「TP200」

▶1954年製。インペリアルPR-100と同時代に生産され、洒落たアルデコ調のデザインでTP100の後継機となる。PR-100と同じユニットが搭載され、箱はウルトラフレックスという構造を採用することで、よりストレートな低音再生が可能となった。こちらも低音の開口部が両サイドにあるのでTP100同様にコーナーでその威力をより発揮する。市場価格130万円ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュ等が誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第2回 Jensen (ジャンセン)

Jensen社は1929年にスピーカーの専門メーカーとしてデンマーク出身のピーター・ジェンセンによってシカゴに設立。その卓越したスピーカー製作技術の高さでウエスタンエレクトリック社にも数々のユニットを納めていた。劇場用、家庭用のスピーカーの他にフェンダー等のギターアンプのスピーカーやハモンドオルガンなどの楽器用にも多く使用されている。音の特徴としてはドライバー、ツイーターのダイアフラムが薄いフェノリック樹脂で形成されているため、声やピアノの音もナチュラルでありながら弦楽器はツヤのある音を奏でる。38cmウーファーは大型のマグネットに軽く張りのあるコーン紙が使われていることで、他のシステムをしのぐ反応の速い低音再生が可能になり、Jazz、Classic、POPSとジャンルを選ばずに対応する。当時、同社の製品は本拠地がアメリカ東海岸であったため日本にはあまり輸入されなかったようだ。

本文/田中伊佐資
キャプション/岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/田代法生

インペリアル 「PR-100」

1954年製、当社のプレステージモデルで大型バックロードホーンキャビネットに38cmウーファー、ホーンドライバー、ツイーターを搭載した3ウェイシステムで、ごくわずかに日本に輸入されていない。本機の特徴としては、ウエスタン型のフルレンジドライバーキャビネットの上部低音開口部分にホーンドライバーとツイーターをセットすることで、大型システムにもかかわらず音のフォーカスがぼけることなくピンポイント再生。低音の反応も速く、レンジの広い音は2ウェイシステムのオートグラフ、ハーツフィールドでも難しいほどリアルでスケールの大きな再生音を実現する。これは、日本で良く知られたモデルでは再現できない音だろう。市場価格350万円ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Jensen

ジャンセン

「TP100」に搭載のウーファー 「A-15PM/ST600」(38cm)



ウエスタンエレクトリックの有名で高額なモニタースピーカー753C(ペア500万円以上)に搭載されているウーファーであるJensen製のKS-12004/A-15PMと同等のタイプで、そのリアルな再生音は歴代のアルニコ38cmユニットの中でも群を抜いている

「PR-100」「TP200」に搭載のウーファー P15LL(38cm)



本機ほど反応が早く厚みのある再生音が可能で38cmウーファーは他にないかもしれない。Jensenが誇る大型3ウェイシステムの心臓部を支えているユニットである

3モデル共通のホーン&ツイーター



「RP201」(ミッドレンジホーンドライバー)

中域再生用ドライバーとして有名なウエスタンエレクトリックの555型ドライバーの流れを汲み、ダイアフラムがフェノリック樹脂でほぼ同じ口径形状のタイプが使われている。アルミ製の中域ホーンとのなじみも絶妙で中域音の再現はとて自然でリアルなものとなっている。



「RP302」(ホーンツイーター)

薄いフェノリック樹脂製のダイアフラムを持ち、その滑らかで良くのびている高域音は当時としてはほぼ抜けた解像力で他を圧倒していたようだ。60年代後半まで生産され、磁気回路は同じだが、正面のホーンと取り付けアダプターの形状が年代によって多少異なる3~4タイプある。最初期のタイプのみ真鍮製でTP-100に搭載されている。ダイアフラムは薄いフェノリック樹脂で形成されている

前回、すなわち第1回の記事について、私はこう思った。
「こりゃ、オレの出る幕ではないわ」。
写真がきれいで、そして岡田さんの説明が丁寧。これでは本文は要らない。編集者にそのことを告げたら、ビンテージ・ビギナーが入りやすいような序章が欲しいとのこと。逆にいえば私は多くを望まれていない。これですっきり気が楽になって、本日もビギナー代表者は、岡田さんに質問するのだった。
「第2回のテーマはジャンセンということですが、これはどうしてなんですか」
「西海岸のJBL、アルテックは、シアター用から始まっているので、セリフ重視の設計なんです。東海岸は音楽性が高いメーカーが多いです。シカゴが発祥地のジャンセンはまさにその代表ですね。また民生用スピーカーだけでなく、50年代以降、ほとんどのギターアンプにユニットを提供しています。つまり当時のギタリストはジャンセンの音を出している。ハモンド・オルガンも同じ。だから相性がいい。またエンクロージャーの作りがとて楽音的です」
すでにジャンセンの最高峰、インペリアルが、目の前にセットしてあった。あつて当然のような口ぶりだが、これを探するのは簡単な話ではない。稀少モデルである。物体から得られる言葉はオーラを発している。最新機器がどうにもならないのはこのオーラだ。説明は後回しとばかりに、岡田さんは立て続けに音楽をかけた。
最初がヨーヨー・マ。なんともいえない艶とつかみがある。響きが玄妙だった。私はクラシックが苦手なので、とっさの感覚的なことしか言えないが、極めてすこやかな気分になった。
次にモーツァルトのピアノ四重奏曲、フォーレイのフュージョン、青江三奈のヴォーカル

と続くわけだが、どれもこれもほんのかな気品がある。この香りは前回トウルソーニックにはなかった。またさらにワイドレンジでもある。50年代初頭の製品でありながら3ウェイ。これがジャンセンの肝だと岡田さんは言う。
設計思想が理にかなっている。充実した中域ドライバーを作って、上と下のユニットで補う。コーン紙は極薄でばんばんだった。弾力性がある。いかに緻密な音が出る感じがした。だがそういうユニットは、低い帯域が苦しい。そこをエンクロージャー(ホーン)がカバーしている。
ジャンセンといえば同軸ユニット。それを入れたものがインペリアルだとばかり思っていた。雑誌でも見たことがある。
「いや違うんですよ。エンクロージャーの上と下を逆にしたものです。あれは日本企画です。アメリカでは通用しません」
「ところで岡田さん、ビンテージって壊れやすいんですけど。または直しにくいとか」
前回、ビンテージの行く手を阻む壁があると書いた。これがその2にあたる。
「ビンテージ製品は、シンプルに作られているのでそう簡単には壊れませんよ。また補修もしやすいです。ネジ式が多くバラバラにできるから、メンテナンスもしやすい。あとは調整のしかただけです。長い間使っていないと皮膜ができて接触不良になる場合もありますが、簡単に直ります」
マグネットの減磁についても心配ない。アルニコは衝撃に弱いけれど、実際、着磁したスピーカーは店内には一個もない、ということだ。だいたい、そんな計算的なことを考えるのは、インペリアルに対して失礼だった。なにしろ名称はインペリアル。こちら側があれこれ言う余地はない。スピーカーが使い手を選ぶのだ。

音楽性を重視するなら東海岸のメーカーがいい！
ワイドレンジかつ、ほのかな気品が味わえる